

公益財団法人 福武教育文化振興財団創立25周年記念事業「犬島 海の劇場」

鳥の劇場「天使バビロンに来たる」

煙突がバベルの塔と重なる—ここでしかできない上演

鳥の劇場の演出家・中島諒人氏による日本初演「天使バビロンに来たる」を11月3日、4日に犬島アートプロジェクト「精錬所」内 近代化産業遺産 発電所跡で上演しました。東日本大震災後、現代文明が問い直されるなか、犬島から新しい社会のあり方を考えるきっかけとなるような意義のある舞台にしたいと望んだ2日間。今号は初日終演後のアフタートークで中島諒人氏に経緯や内容について語っていただきました。[聞き手：大森誠一（NPO 法人アートファーム理事長）]

—場所や作品が決まっていった経緯を教えてください。

犬島のどこかで、何かをやりませんか、とお話をいただいた。犬島は自然がすごく美しく、瀬戸内独特の穏やかさがあって、素敵な場所がたくさんある。しかし、のどかさというのは、人と人とのぶつかり合い、葛藤を描く演劇との両立は難しいところがある。一方で、日本の近代化を彷彿させる銅製錬所跡があって、両方を活かせる方法はないのだろうかと考えていた。

「天使バビロンに来たる」は、いつかやりたいと思っていた作品。このお芝居の中で、神が無からつくった美しい娘の「こんなにも地球って美しいものなの」というセリフと、象徴的に語られるバベルの塔という人間が築いた文明を思い、ちょうどこの場所にぴったりだと思った。

—1、2部は沖鼓島を借景にした東向き、3部は発電所跡の遺構を借景にした西向きの客席。観客が上演半ばで移動するという舞台転換には驚きました。

この辺でやろうとは決めていたが、どちらかを立てるとどちらかが立たない。そのなかで、客席を2つ作ればいいと思いついた。現代劇の場合、昼の野外劇の上演はやらない。照明が使えないし、どうしても外部からいるんな情報が入ってくるので、なかなか架空の空間を作りづらいというのが理由。照明を使うのであれば、舞台を2面作るのは大変だけど、逆に今回の場合は音響と客席を2面作ればどちらも使えるなど。それで、このような形でやることになった。

瀬戸内って乾いているから、ユーフラテス川に見えなくもない。そびえ立つ煙突がまさにバベルの塔と重なる。両方が成立して、ここでしかできない上演になってよかったと思っている。

—古代の文明都市バビロンが舞台ということで、さぞかし現実離れたストーリーかと想像していましたが、逆に現代と古代が似通っている気がしました。

1950年代にスイスの劇作家フリードリッヒ・デュレンマットによって書かれたテキストで、基本的には、文明批評という感覚がある。王様というものは、独裁者で、軍事力があって世界を支配していくものだけれども、一方で王様が悪いとは言えない。彼は世界を混沌から秩序にむけて、不完全なものから完成したものへと導こうと

する。まさしく私たちの社会はそうやって成長してきた。その恩恵を私たちは被って生きている。

けれども一方で文明あるいは制度は、人間を抑圧するところがある。その対極に乞食アッキがいて自由に生きている。自由だけで生きていけるかという、何十億人という人間が自由だけでは当然生きていけないわけで、そうすると、自由は大切だけど一方でなんらかの統治あるいは文明、何かを築きあげていくことも必要となってくる。

今私たちは、人間が一人で生れてきて自由に生きていくという本来の姿と、文明や経済のシステム、法律などとの関係の中で生きていくことをあらためて問い直さないといけない。その2つのぶつかり合いが描かれていることが、このテキストの面白いところではないかと思う。

重いテーマだけど、デュレンマットの場合は、論理を突き詰めた人間のぶつかり合いが、グロテスクでありつつ、結果としてたまらなくコミカルになる。シリアスなだけどもなんだか笑っちゃうところが多分にありますよね。その辺を楽しみながら観られるところが、デュレンマットの魅力なのかなと思う。

—大衆を表す崩れかけたパペットには、中島さんのある種のアイロニーが込められているような…

デュレンマットのテキストでは、常に大衆というのが重要な役割を果たします。有象無象の人たちがでてきて、欲望を丸出し、我儘で移り気で、でもそれが可愛らしくもあり。

ヨーロッパなどの劇場では、雇用された役者がたくさんいるので群衆シーンが可能なんですね。けれど現実的に我々の状況では無理なので、新聞で作って、ぐしゃぐしゃな存在で、人間でそういう見方も捉え方もできるねというところで、私たち自身もそういうものだよねと。

—最後に鳥の劇場について、どういう空間なのか、場所なのか、なぜそこでお芝居を作られているのかを聞かせてください。

日本だと貸しホールはあっても、劇場は少ないという現状がある。貸しホールっていうのは、言わば大きなカラオケボックスみたいなもので、誰でも使えるという場



所。レンタルスペースではあっても作る場所にはならない。ヨーロッパの劇場の場合は、専門家がいてお芝居を作る場所になっている。そこで作られたものが社会的資産として多くの人に共有されている。そういうことをやりたいなと夢想していた。

2006年から鳥取でNPOとして、廃校になった小学校の体育館を自分たちで借りて、地元のご理解を得て、そこを占有させていただき、活動をしている。お芝居を作り、このように県外や海外に出かけて行って作品を観ていただくこととか、国際演劇祭という形で海外から作品を招へいすることをやりながら、単純に演劇が好きだっていう人だけのためだけではなくて、演劇を使って、より広く社会的に劇場とは存在価値があるなということを、私たちなりの、鳥取なりの、人口最少県の、中山間地モデルとして劇場にできることは何かを探そうとしている。

日本は1990年代以降から、世田谷パブリックシアターなどを中心に公共劇場という流れが始まった。それは、西洋の劇場モデルを輸入する…基本的には真似する形であった。でも今はですね、お芝居の中でも語っ

ていたとおり、文明のバベルの塔は崩壊しかかっている。「バビロンはバベルの塔とともに崩壊する」というセリフがあるのですが、「東京は東京スカイツリーとともに崩壊する」という感じだと僕は思っているんですけど。

日本全体が文明的には危機の状況の中で…例えば、乞食アッキは人間が本来持っている自由のうえて生きたいと思っている。それを芸術家と一言で言ってしまうと狭くなってしまいます。

私たちは、基本的に誰に束縛されることなく自由に生きたいと思っている。人間的な価値、魂の自由を発見し、その魂の自由を喜べる場としての劇場を創ることが、今の閉塞している日本の状況のなかで意味があることではないかなと思いつつ、少しずつ活動しているところです。

「天使バビロンに来たる」

作・フリードリッヒ・デュレンマット

古代バビロニアを舞台に神や自然の摂理に抗して巨大な塔を建てようとする王と、権力や制度から自由に生きようとする貧民を対照的に描いた戯曲

Photo by ; Daisuke Aochi



中島諒人 ——— Makoto Nakashima

演出家、鳥の劇場芸術監督、「鳥の演劇祭」プログラム・ディレクター。1966年生まれ。90年東京大学法学部卒業。大学在学中より演劇活動を開始、卒業後東京を拠点に劇団を主宰。2004年から1年半、静岡県舞台芸術センターに所属。2006年より鳥取で廃校を劇場に変え、「鳥の劇場」をスタート。二千年以上の歴史を持つ文化装置＝演劇の本来の力を社会に示し、演劇の深い価値が広く認識されることを目指す。芸術的価値の追求と普及活動を両輪に、地域振興や教育分野にも関わる。